

ヘーゲルにおける概念の客観性と「所与の神話」

川瀬 和也

1. 本稿の目的と構成

ヘーゲルの『大論理学』の第2巻「主観的論理学あるいは概念論」の冒頭には、「概念総論」と題された序論があり、「概念論」全体の議論を方向づける叙述がなされている。また、「概念総論」は「存在論」と「本質論」からなる「客観的論理学」と、「概念論」から成る「主観的論理学」とを結ぶ箇所であるから、ここにおいて『大論理学』全体を貫くヘーゲルのプロジェクトが表明されていると考えることができる。それゆえ、「概念総論」は、『大論理学』を、さらにはヘーゲル哲学を読み解くにあたって、鍵となる箇所である。

ところで、この「概念総論」の全体は大きく二つに分けられる¹。C. イーバーの言葉を借りれば、前半部は「本質論」の終結部を引き継いで「概念の導出」がなされる箇所であり、後半部は、「概念そのものについての固有の考察」がなされる箇所である (Iber 2002, 182)。本稿ではこれらのうち、後半部を扱い、そこでの叙述を読み解いてゆく。

本稿の構成は、以下のように成る。第2節「「所与の神話」と概念の主観性」では、ヘーゲルによる、論敵への批判の意味を明らかにする。このとき、J. マクダウェルの議論を参照しながら、ヘーゲルが概念の形成の場面に着目しつつ、概念と直観についての論敵の考え方を批判していることを明らかにする。第3節「「思考された対象」と概念の客観性」では、ヘーゲルが直観の客観性を否定し、概念の客観性を主張することを見る。第4節「概念のネットワークと本質」では、この概念の客観性の主張が、現象と本質の反省的關係と、概念のネットワークについてのヘーゲルの洞察に支えられていることを示す。第5節「経験からの制約の保証」では、上のヘーゲルの立場への可能な批判を検討することで、ヘーゲルの立場をより鮮明にする。

2. 「所与の神話」と概念の主観性

ヘーゲルは、「概念総論」後半部において、「通俗的な心理学的表象」と「カン

トの超越論哲学」の両者を相手取り、それらに対する批判を展開している。この批判において、ヘーゲルがその論敵にいかなる見解を帰しているかを見ることによって、ヘーゲル自身がどのような立場を取ろうとしているのかを考えるための端緒を開くことができる。

ここで取り上げたいヘーゲルの叙述は、以下のものである。

この「概念と、直観や感情のような表象との」関係は通俗的な心理学的表象においても、またカントの超越論哲学においても、経験的素材、すなわち直観や表象の多様が、先にそれだけで現にあり、そのあとで悟性はその素材に近づいていって、その素材のうちに統一をもたらす、そしてその素材を抽象によって普遍性の形式へと高めるのだと受け取られている。悟性はこのようにして、それだけでは空虚な形式である。この形式は、一方ではかの与えられた内容を通じて実在性を得るが、他方ではその内容を捨象する。すなわち、内容を、なんらかのものではあるが、しかし概念にとっては不要なものではないようなものとして、除き去る。(GW 12, 20)

この引用において、論敵に帰せられている立場は、どのようなものだろうか。

予め結論を述べるならば、ここでヘーゲルが論敵に帰している立場とは、経験における非概念的な所与からの抽象によって概念が獲得されると考える立場である。この立場は、マクダウエルによって、「所与の神話」と密接に関わる、観察概念の形成のされ方の説明として批判されている立場に一致しているように思われる。そこで、本稿では、まずマクダウエルがいかなる議論を展開しているかを確認する。次に、そこで得られた成果を援用しながら、先の引用に立ち戻り、ヘーゲルが論敵にいかなる立場を帰しているのかを明らかにする。

マクダウエルは、カントを援用しつつ、悟性ないし概念能力、すなわち、対象やその表象を何らかの概念と結びつけて考える能力を「自発性の能力」として特徴づける。これが何を意味しているか説明しよう。マクダウエルは、自発性の能力としての悟性と、受容性の能力としての感性の協働こそ、カント哲学の核心だと考える。この描像において、例えば目の前の白い犬を認識するとき、われわれはその犬を感性によって受容しつつ、自発的に悟性を使用して、その対象を白い犬だと見なしている、ということになる。

しかし、このように悟性のはたらきを自発性の能力として特徴づけるとき、マクダウエルによれば、ある懸念が生じてくる。それは、悟性は自発的に、それゆ

え自由に働くのであるから、それを用いての対象の認識ないし経験は、対象の側からの制約を受けないことになってしまうのではないか、という懸念である。彼の議論を追ってみよう。

もし経験的な思考における我々の自由が、その総体におよぶものであるのだとすると、とりわけ、その自由が概念の領域の外側からの制約を受けないのだとすると、このことは、経験における判断が、それらの判断と、思想にとって外在的な実在との関係の仕方に基づいてなされるという、このことの可能性そのものを脅かすように思われる。そして、経験が知識の源泉であるためには、またより一般的な言い方をすれば、経験的判断が実在性に支えられているということが、仮に我々の描像の中に理解可能な仕方では位置づくはずだと考えるならば、このことのためには、このような根拠づけ関係は、当然なくてはならないものである。(McDowell [1994] 1996, 5)

独特の言い回しがなされてはいるが、ここで述べられていることを理解するのはそれほど難しくない。マクダウェルによれば、「我々の自由」、すなわち、自発性の能力としての概念能力は、我々の経験の隅々にまで行き渡っている。それゆえ、目の前の犬が白いことを知覚し、この犬は白いと判断を下すとき、我々は悟性をはたらかせている。しかし、この描像は、我々が判断とその真偽について素朴に持っている描像に反するように思われる。なぜなら、「経験における判断」が、「思想にとって外在的な実在」と関わることなく成立してしまうように思われるからである。これは例えば、「この犬は白い」という判断が、目の前の白い犬という、概念ないし思想の領域の外にあるものとは無関係に成立してしまう、ということである。このとき、判断を下すときの経験は、目の前の犬が何色であるかという知識を与えてはくれないことになり、問題が生じる。このことを防ぐためには、対象としての白い犬によって、「この犬は白い」という判断が制約されるという関係が、なんとしても必要である。このように、自発性の能力としての概念が経験の隅々に行き渡るという考え方からは、問題が生じるように思える。

マクダウェルは、「所与の神話」ないし「枠組みと所与の二元論」を、この問題への対処法のひとつとして位置づける。これは、それ自身は概念の領域の外部にあって判断を外側から制約するものとして、「所与」の存在を仮定することで、経験が知識の源泉であることを保証しようとする考え方のことである。

これには様々なタイプのものがありうるが、ヘーゲルの議論を読み解くという

我々の目的にとっては、それらのうち、この所与説を前提しつつ展開される、観察概念の形成についての説明が重要である。マクダウェルはこの説明を、以下のように描出する²。

この想定された要求[所与のような経験的内容が必要であるということ]は、そのような概念[観察概念]の形成に関する、よく知られた描像に反映されており、この描像は、所与という考え方と自然に符合するものである。この描像は、もし、ある概念を含むような判断が所与に基づいている、という事実によって、その概念が、その一部でも、構成されねばならないとするならば、このとき、関連する概念能力は、対応する所与の断片と出会うことによって獲得されたのでなければならない、という考えに基づいている。このような所与との出会いというものが仮にあるとするならば、それは究極的な保証を指差すことが可能であったような機会だということになるだろう。しかしながら、我々の感性が影響を被るいかなる日常的な場合においても、われわれに現前するものは、多様な所与でなければならない。それゆえ、観察概念を形成するためには、主体は現前する多数の所与のうちの適切な要素を抽象して取り出さねばならないということになる。(McDowell [1994] 1996, 7)

ここで提示される、所与説と符合する観察概念の形成に関する描像とは、白い犬を用いた例で考えれば、以下のようなものだと考えられる。我々は、白い犬から、「白」という観察概念を形成する。この概念の形成は、「白」の概念に対応する所与の断片、つまり、白い犬の白さが、感性を通じて我々に与えられることによってなされる。しかし、白さが与えられるときには、犬が持つ他の様々な性質、例えば体重や、毛のふかふかした感じ、若く健康である、といった諸性質も、またこの所与は概念形成以前のものだと想定されているから、こうした形で言葉に表すことができないような諸性質さえも、同時に与えられているはずである。この意味で、所与は常に「多様な所与」である。それゆえ、「白」という観察概念が形成されるときには、これらの多様な所与の中から、「白」という性質だけが抽象によって取り出されている、ということになる。

これが、所与説に基づく、観察概念の形成に関する描像である。こうした議論を踏まえて、マクダウェル自身は、自ら提示した先ほどの懸念を、所与の概念に訴えずに解消できるということを示すべく、議論を展開することになる。しかしここでこれ以上彼の議論を追うことはせず、ヘーゲルに立ち返ろう。

ヘーゲルが先の引用において、論敵に帰していた立場はどのようなものなのだろうか。このことを明らかにするための材料は、既に出揃っている。というのも、引用において論敵に帰されている立場は、まさに今確認した、観察概念の形成を所与説に基づいて説明する立場だと考えられるからである。白い犬に関する所与から、白の概念を形成する、という例を念頭に、詳細を確認してみよう。先の引用において、ヘーゲルの論敵の描像では、まず「経験的素材」が「先にそれだけで現に」とあるとされる。これは、目の前の犬について、それが白いと判断する以前に、何らかの内容が受容されている、という事態を表していると考えて良いだろう。その内容とは、直観の多様、すなわち「白い」、「重い」、「ふかふかしている」といった、多様な内容を含んだ所与である。次に、「悟性はその素材に近づいていって、その素材のうちに統一をもたらす」。つまり、思考や概念とは無縁であった所与に、あとから概念能力としての悟性がはたらきかけ、「この犬は白い」のような判断を下す。このときに悟性が行っていることは、「その素材を抽象によって普遍性の形式へと高める」ということである。つまり、悟性の働きによって、個別的な犬から、普遍的な白の概念が獲得されるのだが、このことは素材からの抽象というはたらきによって達成される。それでは、「抽象」とはどのようなはたらきを言うのだろうか。それは、「内容を捨象する」はたらきであって、内容を「概念にとっては不要なものではないようなものとして、除き去る」はたらきだとされる。これは、もとの所与に含まれていた、「重い」、「ふかふかしている」、等々の、「白」という概念とは無関係な内容を捨象することを指す。

以上の解釈が正しいとすると、マクダウェルによって描き出されていた、所与説に基づく観察概念の形成の説明と、ヘーゲルが論敵に帰している立場は、驚くほど一致している³。いずれにおいても、白の概念の形成が、まず所与として白い対象が与えられ、あとから悟性が白以外の性質をその対象から捨象すること、として説明されることになるのである。

ところで、ヘーゲルはなぜこのような仕方での観察概念の形成の説明に、否定的に言及しているのだろうか。それは、こうした説明が、所与としての直観こそが客観的かつ実在的であるということと、概念は主観的なものにすぎないということを示唆するからである。この点を正しく捉えることは、ヘーゲル自身が、どのような論点に関して自説を展開しようとしているのかを理解するために重要である。以下、このことを確認しよう。

ヘーゲルは、「かの直観と表象を通じて与えられた素材が、概念とは違って、実在的なものとして妥当するとされてよい、ということは、絶対にない」と、述べ

て、実在性に関して、所与としての直観を概念より優位にあるとする考え方を明確に否定する。ここで否定される論敵の考え方は、概念と直観のそれぞれのあり方に関して、ヘーゲルにとって受け入れられない結論を導く。まず、概念については、「それは概念にすぎない」(GW12, 21) というような、概念を単に主観的なものと見なす通俗的な考え方が生じる。なぜなら、この見解によれば概念は「抽象的なもの」(GW12, 21) であって、それは「具体的なものから、もっぱら我々の主観的な目的のために、あれこれの徴表を取り出す」(GW12, 21) ことによって得られるものだということになるからである。他方、こうした抽象の作用を被る直観については以下のように言われる。抽象は、対象の諸特性・諸性状から、「その対象の、他の多くの特性・性状を除去する」(GW12, 21) という仕方で行なわれるのだが、このとき、もとの諸特性・諸性状からは、「その価値と尊厳とに関しては何も奪われることがなく、それらの特性・性質は実在的なものとして、彼岸にはあるが、それでもまだ完全に妥当なものとして残される」(GW12, 21) ことになる。ここで、ヘーゲルの言う、抽象作用を被る前の「諸特性・諸性状」が、感性によって受け取られた、所与としての直観の多様を指していることは明らかだろう。これらの直観の多様は、悟性の働き如何にかかわらず、いわば特権的に実在的・客観的なものとして、その妥当性を認められ続ける⁴。

以上のように、論敵の見解は、直観こそ客観的なものであり、概念は主観的なものにすぎない、という見方を導くことになる。そして、次節で見るとおり、ヘーゲルはこれに真っ向から対立する見解を提示する。

3. 「思考された対象」と概念の客観性

本節では、ヘーゲル自身の見解を明らかにする。ヘーゲルは、四つのことを主張している。第一に、前節で示唆した通り、所与としての直観の多様ではなく、むしろ思考された対象こそが客観性を持つ。第二に、概念はそれ自身で客観性ないし実在性を持つ。これらの第一と第二の主張は一体となって、概念の働きに関する、彼自身の描像を構成している⁵。

さて、ヘーゲルは、これら二つの主張をどのように提示し、正当化しようとしているのだろうか。まず、第一の主張について見てみよう。ヘーゲルは、「思考が与えられた対象を手に入れるとき、この対象はこのことによって変化させられ、感性的な対象から思考された対象へと作り変えられる」と述べている。この見解と、前節で、論敵に帰せられていることを確認した見解との相違を見て取ること

が重要である。論敵の見解では、悟性による思考は、直観の内容をそのままにしておいて、そこから内容を捨象するものだとされていた。しかし、ヘーゲルの見解では、思考によって、「感性的な対象」は「思考された対象」へと「作り変えられる」。このことは、ひとたび悟性が所与の感性的な対象に働きかけたならば、この働きを被って作り変えられた、「思考された対象」こそが客観性を持つ、ということが認められ、もとの「感性的な対象」は、真の客観的な対象という地位を失う、ということを示しているように思われる。続く箇所における、「対象はむしろその対象の概念のうちにあってはじめて、その真理のうちにあるのであって、[...]対象が与えられるときの直接的なあり方のうちでは、対象は単なる現象であり偶然的なあり方にすぎない」というヘーゲルの文言は、このことを裏付けている。ここで概念のうちにあるとされる対象が「思考された対象」であり、「与えられるときの直接的なあり方」の対象が「感性的な対象」に対応しているからである。また、ヘーゲルは、「対象を概念把握する対象の認識は、対象が即かつ対自的にある仕方での対象の認識であって、概念は対象の客観性そのものであるはずだ」とも述べている。この文言は、判断が思考されるものとしての対象に関わるが、この思考された対象は客観的なものであって、それゆえ判断は客観と適切に関わりうるということの意味する。例えば、「この犬は白い」という判断は、感性的な対象としての犬ではなく、思考された対象としての犬に関わることで、客観との関わりを保証される。これは、概念がそれ自身で客観性を持つ、という第二の主張に当たるものであり、論敵の見解と全面的に対立する。

これらの主張の要点は、R. B. ピピンのヘーゲル解釈において言い当てられているように思われる。ピピンは、カントの『純粋理性批判』B版の「超越論的演繹」後半の課題が、カテゴリーが適用可能であるような直観が実際に存在するというを示すことにあった、とする。その上で、ピピンは、ヘーゲルの哲学を、この点に関してカントの議論を失敗と見なし、その完成を企図したものであると解釈する。この観点から、ピピンは、ヘーゲル哲学において、「思想が直観の純粋な多様に関係するという説明から、思想が「自己を規定する」という説明へ」(Pippin 1989, 31)の移行が生じているとする。前者はカントの描像、後者はヘーゲルの描像である。ピピンによれば、「このような説明は認識における所与の役割を完全に消去しはしないが、所与が所与として捉えられる仕方を、根本的に、「思想」に対して相対化することになるし、全く異なった客観性の概念を導入する」(Pippin 1989, 31)ことになる。

ピピンはこの解釈を『精神現象学』と『大論理学』の全体を視野に収めつつ展

開するのであるが、彼の解釈には細部に粗さも認められる⁶。しかし、この「概念総論」の読解においては、ピピンの指摘は妥当かつ重要なものであるように思われる。つまり、ヘーゲルはこの箇所、実在性に関して直観が概念より優位に立つ、という論敵の立場を退け、概念がそれ自身で実在性を持つのだと主張する。すなわち、思考された対象こそが客観性を持ち、概念がそれ自身で客観性を持つという、ピピンの言う「思想の自己規定」の立場を宣言する。同時にヘーゲルは、「思想」に対して相対化された、「全く異なった客観性の概念」として、感性的な対象と明確に区別された思考された対象という概念を導入しているのである。

このように考えることができるならば、次に問題になるのは、ここで論じられている「概念」とはどのようなものであり、それに相対化された客観としての「思考された対象」とはどのようなものなのか、ということであろう。これについて、節を改めて論じてゆきたい。

4. 概念のネットワークと本質

前節では、「概念総論」のヘーゲルが、概念の実在性を主張すると同時に、客観性の捉え方そのものを変革しようとしていることを示した。それでは、ここで実在性を主張される概念とはどのようなものであり、また客観性はどのようなものとして捉えられることになるのだろうか。ヘーゲルの思考を追っていこう。

まず、思考された対象についての議論を追ってみる。ヘーゲルは、感性的な対象から思考された対象への変化は、「対象の本質的なあり方 (Wesentlichkeit) を変えるものではない」と指摘する。この文言の意味は、『大論理学』において「概念論」に先立つ「本質論」においてなされる、「反省」をめぐる議論との連続性を把握することで理解できる。ここでのヘーゲルの議論が、「本質論」の議論と結びつくものであることは、「現象」について「本質論」で集中的に論じられていることや、そこで独特の仕方で用いられる「本質的なあり方」という語がここでも用いられていることから推察できる⁷。

加えて、引用に続く箇所でヘーゲルは、以下のように述べている。

これについて、以下のことがきっと思い起こされたことだろう。この[直観の]多様なものは概念に対して直観に属しており、その限りで、多様なものはむしろまさに概念において止揚されるはずだし、概念を通じて対象はその偶然的でない本質性 (Wesenheit) へと還帰するはずである。この本質性は現

象のうちへと歩み入るのであって、それゆえまさに現象は単なる本質を欠いたものではなく、本質の顕現なのである。(GW12, 24)

この叙述において、ヘーゲルが、先ほど「現象」であると指摘された「感性的な対象」と、本質との間に反省的構造を持つものとして「本質論」で論じられた「現象」とを直接に結びつけていることは明らかである。「本質性」への「還帰」や「本質の顕現」といった文言は、このことを表している。さらにここでは、現象が本質性に還帰するのは、「概念を通じて」である、とも言われている。これは、現象と本質の間に反省的構造が成り立っていることの把握は、思考によって起こることにはほかならない。それゆえ、「感性的対象」が「思考された対象」になり、即かつ対自的になる、ということは、現象がその本質との間の反省的構造を伴ったものとして把握されるようになる、ということだと考えられる。本質が主観的でなく客観的であることは明らかであるから、さしあたり言葉のつながりの上では、この議論が「思考された対象」こそが真の客観性を持つという彼の見解を正当化するものとして提示されていると言える。

ここまで、思考された対象とは、概念を通じて、現象と本質との反省的関係の中で把握されるようになった対象のことだ、ということを示してきた。しかしこれだけでは、ヘーゲルの用いる術語の間の繋がりを示したに過ぎず、彼の議論の内実を捉えたことにはならないだろう。これを考えるためには、まず、ヘーゲルが概念をどのようなものだと考えているかを明らかにする必要がある。なぜなら、ここで示された思考された対象は、ピピンの言う、概念のあり方に相対化された新たな客観性だと考えられるからである。

ヘーゲルの言う概念とはどのようなものか。結論を先に言えば、概念とは、様々に関係し合いながらネットワークを成すものである。そしてこのネットワークは、個物をも取り込むものである。以下、このことを見てゆく。

ヘーゲルは、論敵を批判する際に、「概念を説明し、[...]類を定義するためには、明らかに、種的な諸規定性も必要になる」と述べている (GW12, 22)。また、これと同じ段落では、次のようにも述べられる。

概念はア・プリオリな総合であるようなものなのだから、概念はまさに規定性と区別とを自己自身のうちに持っていることになる。その規定性は概念の規定性であり、それゆえ絶対的な規定性、個別性であるから、概念は、全ての有限な規定性と多様なものとの根拠であり源泉である。(GW12, 23)

ここには、概念が普遍・特殊・個別の全ての契機を含んでいるということが明言されている。このヘーゲルの主張は、様々な概念の間には、ネットワークが成立していなければならないという主張として解釈できるだろう。この主張は、一面では、最近類と種差によって概念を定義するという伝統的な思考様式に法っている。例えば、白の概念は黒や赤、青といった様々な特殊概念や、それらの類としての色という普遍概念と関係して初めて定まる。このような考察を様々な概念に適用してゆけば、最終的には、諸概念が全体として一つのネットワークをなしていなければならない、ということが帰結するだろう。しかしヘーゲルの主張はこれにとどまらない。彼はさらに、これのネットワークが「絶対的な規定性」としての「個別性」、すなわち個物も含んでいると主張する。つまり、白の概念は、個々の白い犬や白い紙等々の白いものがあり、それと関係するということによって、初めて意味を持つ。

この最後の点は、ヘーゲルの言う概念の实在性の内実を示している。ヘーゲルは概念のネットワークに、様々な普遍概念・特殊概念の全体だけでなく、個々の個別的なものも含まれていると考えている。ところで、個別的なものとは、まさに実在するものとして理解されているものである。それゆえ、概念は個別的なものという実在を含んでおり、实在性を持つ。

このように、ヘーゲルは概念に関して、それは個別的なもの、客観をもネットワークに取り込むのだと主張する。この主張を念頭に置くとき、それと対になる客観の側についてヘーゲルが述べていたこと、つまり、思考された対象とは何かということも、明らかになるように思われる。

対象が思考された対象となり、現象と本質の反省的關係において把握されるとはすなわち、対象が、概念のネットワークの中で、様々な他の物や概念との関係の中で把握されるということである。再び、白い犬の例で考えよう。目の前の白い犬を、思考された対象として把握するとはどういうことか。それは、まさにその犬を「白い犬」として判断しつつ把握するということである。このような判断を可能にしているのは、まずは「白」や「犬」という、その個体と結びつく概念である。しかしここで、概念のネットワークという先の考えが思い起こされねばならない。すなわち、「これは白い」という判断のためには、例えば赤や黒、青といった他の色の概念や、さらに上位の色そのものの概念との関係も把握されていなければならないし、白い紙や白い皿、白い猫、あるいは白くない、黒い犬といった、様々な個物との関係も把握されていなければならないだろう。なぜなら、

「これは白い」と判断しているときには、同時に、「これは黒くはない」ということや、「これは色を持っている」ということ、また、「これはあの白い紙と同じ色を持ち、あの黒猫とは異なる色を持つ」といったことも、通常は判断できているはずだからである。

このように、様々な概念や個物によって成り立つネットワークの中に置かれるということが、対象が思考され、現象と本質との反省的な関係の中で理解されるということである。そうだとすると、ここで言われる本質とは、その対象がネットワークの中で他の様々な概念と結ぶ関係のことであり、現象とは、そのネットワークを背景としつつ、前景にあらわれてくるものとしての対象であるということになるだろう。ヘーゲルの描像においては、このような仕方では、概念は実在性を保証されるし、他方で客観のあり方そのものが変更を被るのである。

5. 経験からの制約の保証

これまで、ヘーゲルが、概念のネットワークの中に位置づけられてはじめて対象が客観性を持つ、と考えていたことを示してきた。しかし、この描像においては、マクダウェルが所与の神話の動機として指摘していた問題を解決できないのではないかと、という懸念が生じうるように思われる。その問題とは、「経験における判断」が、「思想にとって外在的な実在」と関わることなく成立してしまうのではないかと、という問題である。本節では、ヘーゲルの議論がこの問題を回避示すことを示す。

この懸念は、これまで見てきたヘーゲルの描像を、「あらかじめ概念のネットワークのようなものが固定されており、対象の客観性は、そのネットワークの中に位置を持つことによって保証される」という描像として理解することから生じる。このように理解してしまうと、例えば、生物学上の発見によって、それまで魚類だとされていたクジラが哺乳類に属することになった、といった場面を考えるとき、ヘーゲルの描像はこれを説明する力を持たないことになってしまうだろう。

さらに、この描像では、どのような対象が存在するかは、予め、概念の地図のなかに埋め込まれた形で、いわば生得的なイメージとして、全て我々の頭の中に埋め込まれていることになる。そうだとすると、全く新種の動物の個体に遭遇した場合には、その個体はもともと概念のネットワークの中に位置を持たなかったということになり、認識すらされないということにもなりかねない。

しかし、この批判は誤解に基づいている。こうした誤解が生じるのは、ヘーゲル

の描像における本質や概念を、固定的なものだと考えたためである。しかし、ヘーゲルはそのような考え方を明確に否定するはずである。なぜなら、ヘーゲルは本質と現象の間に成り立つ関係を「反省」だと捉えていたが、誤解の根底にある考え方は、彼が否定する「外的反省」に属しているからである。

ヘーゲルは、「本質論」第1篇「それ自身の内での反省としての本質」第1章「仮象」C. 「反省」b. 「外的反省」で、次のように言う。外的反省は、「そこから反省が始まるもの」であり、かつ「そのものに由来して初めて反省が自己内へと還帰することであるようなもの」を見出す。このとき、「この前提されたものが否定的なもの、措定されたものであるということは、前提されたもの自身には関係がない」(GW11, 253)。詳述する紙幅は残されていないが、ここでの「そこから反省が始まるもの」とは直接見出される仮象であり、「概念総論」の文脈では現象にあたる。また、「前提されたもの」は本質である。それゆえ、ここで述べられていることは、本質は仮象から始まる反省によって到達されたものであるのだが、このことと、本質がどのようなものであるかは関係ない、とする考え方が「外的反省」だということである⁸。「本質論」において、この外的反省という考え方は、直後に否定され、議論は「規定された反省」へと移ってゆく。

このことを踏まえるならば、現象と諸概念のネットワークとの反省的な関係においても、諸概念のネットワークが固定されたものだと考えることは、ヘーゲルによって否定されるように思われる。むしろ、現象と概念のネットワークとの関係は、相互依存的なものだと考えられるべきである。すなわち、一方で、現象としての思考された対象がどのようなものであるかは、概念のネットワークがどのようなものであって、また対象がその中のどこに位置を持つのかということによって決まる。しかし他方では、概念のネットワークがどのようなものであるかは、どのようなものが対象として現れてくるか、ということに依存して決まる。そうでなければ、両者の結びつきは反省的であるとはいえない。

このことが理解されるならば、ヘーゲルの考える本質の内実をなす概念のネットワークは、固定的なものではないということがわかる。そうではなくて、このネットワークは、どのような経験が生じ、それゆえどのような対象が現れてきたのか、ということに応じて、改訂されるものである。他方で、経験そのものの成立は、この概念のネットワークに依存してもいる。このような描像をとることで、ヘーゲルは、経験が概念のネットワークを規定するという仕方で、マクダウェルが「所与の神話」の動機として指摘する問題、判断に対する外界からの制約を確保するという問題をクリアしているのである。

6. 結論

本稿では、「概念総論」後半部におけるヘーゲルの議論がどのようなものかを考えてきた。これによって示されたのは以下のことである。まず、ヘーゲルは、所与説に基づく概念の形成の説明を論敵に帰し、批判しているのであった。本稿ではこのことを、マクダウェルの議論との類似性を手がかりに示した。さらにヘーゲルは、この論敵が、所与としての直観の客観性を絶対視し、概念に客観性を認めない立場であることを批判する。

こうした論敵の描像に対して、ヘーゲルは、概念こそが客観的であり、また、悟性の作用の後には対象そのものが変化する、という描像を提示する。この描像は、概念は個物との反省的な関係に立つ、ということと、概念は単独で成立せず、必ずネットワークを成す、ということによって正当化されている。このとき、概念のネットワークは固定的なものと捉えられてはならず、現象と相互依存的に変化するものだと考えられねばならない。

本稿で示した解釈は、以下のような研究の展望を開く。第一に、現象と本質の間に成り立つ反省的關係について、ヘーゲルは「本質論」を前提しつつ論じているから、翻って「本質論」の議論が、この箇所結実するものとして理解される。第二に、「概念論」の本論における概念、判断、推理をめぐるヘーゲルの議論は、概念のネットワークについての議論を詳細に展開したのものとして理解できるように思われる。これらの議論は、他日に譲ることとしたい。

※本研究は、平成24年度日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

¹ たとえば、K. デュージングは、著書でこの箇所を論じるに際して、節を二つに区分している（Düsing 1976, 228-43）。

² マクダウェルは、この立場への批判の源泉が P. T. ギーチであると指摘している。McDowell（[1994] 1996, 7）および Geach（[1957] 1971, 33-44）を参照。

³ マクダウェル自身も、ヘーゲルを「所与の神話」批判の先駆者と位置づけている（McDowell 2009）。

⁴ イーバーは、ヘーゲルが「カントにおいては、知覚された対象の豊かさが前提され、概念はその裏に取り残されている」と考えていたと指摘しているが、この指摘は本稿の解釈と整合する（Iber 2002, 186）。

⁵ デュージングは、本稿と全く異なる解釈を展開しているが、彼の解釈には問題がある。川瀬（2012b）を参照。

⁶ 私は以前に、「暴力」概念の理解に関して、彼の解釈の問題点を指摘した（川瀬 2012a, 134-7）。

⁷ 「現象」章冒頭部（GW11, 341-2）を参照。

⁸ 高山守は、外的反省において「反省」はすでに、その運動を廃棄した「否定的なもの」である」と指摘している（高山 2001, 329-30）。また、寺沢恒信も、「外的反省」を、経験的事実と、それと独立の一般法則とを結びつけるものだとして解している（寺沢 1983, n. 43）。

[参考文献]

1. 全集

GW: Hegel, Georg W. F. 1968-. *Gesammelte Werke*, Friedrich Hogemann und Walter Jaeschke (Hg.), Felix Meiner.

2. その他の文献

- Düsing, Klaus. 1976. *Das Problem der Subjektivität in Hegels Logik (Hegel-Studien Beiheft 15)*, Bouvier.
- Iber, Christian. 2002. "Hegels Konzeption des Begriffs," in *G. W. F. Hegel: Wissenschaft der Logik*, Anton F. Koch und Friedrike Schick (Hg.), Akademie, 181-201.
- Geach, Peter. T. (1957) 1971. *Mental Acts*, Routledge & Kegan Paul.
- 川瀬和也. 2012a. 「暴力」と「理性の狡智」——ヘーゲル『大論理学』における目的論の構成原理——, 『論集』30, 東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室編, 132-45.
- . 2012b. 『大論理学』における概念と真理, 『ヘーゲル論理学研究』第18号, ヘーゲル〈論理学〉研究会編, 33-47.
- McDowell, John. (1994) 1996. *Mind and World: With a New Introduction by the Author*, Harvard University Press.
- . 2009. "Hegel's Idealism as Radicalization of Kant," in John McDowell, *Having the World in View: Essays on Kant, Hegel, and Sellars*, Harvard University Press, 2009, pp. 69-89.
- Pippin, Robert B. 1989. *Hegel's Idealism: The Satisfactions of Self-Consciousness*, Cambridge University Press.
- 高山守. 2001. 『ヘーゲル哲学と無の論理』, 東京大学出版会.
- 寺沢恒信. 1983. 「訳者注」, 『ヘーゲル 大論理学 2』, 所収, 以文社, 281-442.